

教科探究 音楽科

「生きた知識」と「生きた技能」を生き生きと身に付けられる音楽科への期待

—— 既知の知識と向き合い自分なりの捉えで創生していく

「構造化、再構築・更新される知識とそれを支える技能」——

国立大学法人愛知教育大学教授 新山王政和

1. 音楽科における知識と技能の概念を拡大する

音楽科における知識と技能に関する意識をより幅広い捉え方へ転換し、学校教育における一教科としての目標を拡大することで、芸術性の陶冶を大切にすることでなく、「既知の知識の学びに加えて、自分なりに捉えて積み上げていく生きた知識」と、「歌唱や楽器の演奏などに必要な操作性の習得に加えて、自分なりの捉えに基づいて知を創生していく技能」へと拡大することを提案したい。そもそもmusicの語

源であり知的活動を司る女神「ムーサの技」を意味するmusicは、知的なものと技能的なものを互いに包含しており、音の操り方を知り、音を操ることを楽しみ、その巧みさの追求を楽しむことの全てを融合したものである。よって、音の塊や羅列に音楽的意味や価値を付加し、そこから感情や情動を呼び起こして真の意味でmusicを楽しむためには、既知の知識や操作性の技能を裏付けとしながら、自分なりに理解し解釈することで自らの思いや意図を具体化するために必要な演奏上の工夫を試行錯誤したり、他

者の演奏からそれを推理・類推したりすることで、自分なりの楽しさを創生していく力が不可欠になる。

2. 音楽科における「生きた知識」

音楽科における知識とは、それまでに積み重ねてきた音楽活動や音楽経験と照らし合わせながら既知の知識を自分なりに整理し（構造化）、それらが示す意味や働き、効果などを考えたり体感したりすることで自分なりの嗜好や価値観へと高めていき（再構築）、さらに様々な体験や活動を通じて考えたり確かめたりすることで、自分自身の捉え方が間違っていないか、他の考え方は無いのか、自分なりの価値観に齟齬や矛盾は無いのか、思考を伴った試行錯誤によって確認し、知識をより強固なものとして更新していくものである。音楽の分野では「知っていることと出来ることは違う、知っているだけでは演奏に繋がっていかない、演奏として音へ還元し音楽表現

へ結び付けることができて初めて知識が生きてくる」ということが経験的に知られており、既知の知識と出会い、自分なりに整理し、活動を通じて実感を伴いながら理解したことが蓄積されていく、これこそ正に構造化され再構築・更新される知識である。これを活性化するためには、予め同一の原体験かそれに通ずる一連の類似体験を持つていて、それを再構成して推理・類推することによって自分なりの意味付けや価値付けを行い、新たな価値観を形成するプロセスが求められる。つまり全く体験したことがない未知からは大きな感動を得ることは難しく、見る側・受け手の側が有する知識とそれを得る機会である原体験の範囲内ではしか感動は得られない。よって音楽科における知識には、音や音楽と結びついた様々な原体験から得られる多彩なイメージと多様な価値を再発見・再認識する活動を通じて、知識を整理・構造化させ、自分なりの捉えで再構築しながら更新

していく「生きた知識」も含めるように提案したい。

3. 音楽科における「生きた技能」とは

知識を「生きた知識」にするためには、音や音楽からイメージを導きだし、連想したイメージとイメージを融合させて新たに自分なりのイメージを再構成していくような活動において、仮定とその結果を知識の裏付けを伴いながら推理したり、因果関係を頭の中で類推したりするシミュレーションの力が求められる。ICTの疑似体験により失われつつあるこの試行を伴った思考経験を補い、既知の知識と自ら向き合い、自分なりの知識の解釈や理解を創生していく力を支えるものとして、音楽科で得られる次の能力も「生きた技能」として重視するよう提案したい。

①人と人との関わりから生まれる豊かで多彩な刺激に満ちた実体験を通して、知識を構造化し、再構成・更新していく力。

②音楽や演奏に対する考えや意見を伝え合い理解し共有し合うことで、互いの意見を比較し分析する活動を通して互いの思考と向き合うコミュニケーションの力。

③音楽の様々な活動や練習を通じて求められる計画立案の力（練習の段取り力や見通し力）と問題解決の力（課題達成に必要な知識や技能を自ら身に付ける力）。

④自分自身の知識レベルや技能レベルを判断し自身を見つめ直す自己理解の力や、他者の意見や思いを理解する他者理解の力。

4. 音楽科における論理的・創造的思考くプログラミング

音楽科におけるプログラミング学習とは、パソコンやタブレットを使って曲作りをすることだけではない。音楽という素材を用いながら、自らの問題解

決のために情報機器をどのように活用できるのか、そのためにはどのように指示すればよいのかを論理的・創造的に考えていく経験を深める場である。例えば、学習指導要領〔共通事項〕の「音楽の仕組み」を活用しながら曲を作ることで、論理的・創造的に思考したり、課題を発見・解決したりする体験を重視するように提案したい。

以上、音楽科における知識と技能について、「音楽はアイデンティティやコミュニケーションのツール」という子供達が抱くニーズへ応え得るより幅広い考え方への意識転換を提案させて頂いている。一考されることを願いたい。

【参考資料】

①拙著「音楽についてこう考える、こう言いたい！
学習者アンケートWeb調査」子供にとって音楽

はアイデンティティやコミュニケーションのツール」、『日本音楽教育学会・音楽教育実践ジャーナル』2016。

②拙著「気付く・感じ取る・比べる・考える・まとめる・伝える、鑑賞は音楽科授業におけるActive Learning」、『音楽鑑賞教育vol.22』2015。

③拙著『改訂版 新しい視点で音楽科授業を創る』2011、Stylenote社。